

https://farid.ps/articles/israel_stolen_name_land_lives/ja.html

イスラエル：盗まれた名前、盗まれた土地、盗まれた命

アメリカの福音派キリスト教徒による現代のイスラエル国家への支持は、創世記12:3の選択的な解釈に基づいています：「あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたを呪う者をわたしは呪う。」米国下院議長のマイク・ジョンソンのような政治家は、この聖句を引用して、イスラエルへの政治的支援を神聖な義務として枠組みます。しかし、この解釈は、何千もの宗教的・歴史的発展を危険なほど単純な方程式に圧縮します：現代のイスラエル＝聖書のイスラエル＝神の恩恵。

このエッセイは、その前提に挑戦し、土地とその民の歴史に連続性を取り戻します。契約の眞の継承者は、国民国家や人種的カテゴリーによって定義されるのではなく、神の啓示との忠実な連続性と、土地にとどまるこことによって定義されます。この基準によれば、現代のイスラエル国家ではなく、パレスチナ人こそが古代イスラエルの遺産を最も体現しています。

異邦人からイスラエル人へ：最初の契約

エレツ・イスラエル（聖書の土地）の最初の住民は、現代的な意味での「ユダヤ人」ではありませんでした。彼らは異邦人、カナン人やヘブライ人、レバントの部族民でした。彼らのイスラエルとしてのアイデンティティは、血統ではなく、シナイ山でトーラーを受け取った契約によって始まりました。その瞬間、民族や遺伝子ではなく、神の導きを受け入れることによって民は「選ばれた」者となりました。

イスラエル人からキリスト教徒へ：新たな啓示

イエス（PBUH）が刷新と慈悲のメッセージを携えて現れたとき、同じ民の多くが彼をメシアと認め、契約の更新と見なしたものを取り入れました。彼らは最初のキリスト教徒となり、ユダヤ教を拒否するのではなく、それが成就したと信じました。イエスを拒否した他の人々はユダヤ人コミュニティ内に留まり、初期のキリスト教徒と平和に共存しました。クリストを敵対的に拒絶し、彼を偽預言者と呼び、タルムードの一部のテキストによれば「地獄で糞便の中で煮えている」と嘲笑したのは、少数の急進的な派閥だけでした。これらは多数派ではなく、しばしば近隣から拒絶され、追放とディアスボラ、特に東ヨーロッパへと導かれました。

キリスト教徒からムスリムへ：最終の啓示と継続的な存在

ムハンマド（PBUH）が最後の使者として現れたとき、同じコミュニティの多くが再び契約の次のステップを受け入れました。彼らはムスリムとなり、トーラーから福音書、そしてコーランへと続くこの宗教的連続性に矛盾を見ませんでした。他の人々はキリスト教徒のまま、土地

で平和に暮らし続けました。彼らは留まり、ローマの迫害、ビザンチン支配、イスラム教のカリフ制、十字軍の侵略、オスマン帝国の統治を耐え抜きました。彼らのルーツは途切れませんでした。

この人口——現在パレスチナ人として知られる——は去りませんでした。彼らは土地を耕し、その言語を話し、伝統を守りました。彼らは、シナイに最初に立った者たち、キリストと歩いた者たち、メッカに向かった者たちの精神的・生物学的子孫です。

シオニズムの出現：回帰ではなく断絶

対照的に、現代のシオニズム運動は契約の継続ではなく、根本的な断絶でした。その創設者は主に世俗的であり、宗教法ではなくヨーロッパの人種ナショナリズムによって形作られました。彼らはキリストとムハンマドの両方を拒否しながら、古代イスラエルからの出自を主張しました。最も重要なのは、彼らが土地に留まったコミュニティからではなく、預言者の導きを拒否し、何世紀も前に追放された敵対的な亡命少数派から生まれたことです。

多くのシオニストは、東ヨーロッパのコミュニティ出身で、レバントから何世紀も離れた場所で形成されました。一部は中東の祖先を持っていましたが、その遺産の多くは外国での改宗と同化に由来します。それでも、これらのコミュニティが土地への独占的な神聖な権利を主張し、決して去らなかった者たちの子孫を追い出し、殺害さえしています。

ナクバ：契約の逆転

イスラエル国家が1948年に設立されたとき、それは契約を復元せず、それを破ったのです。何十万ものパレスチナ人、ムスリム、キリスト教徒、ユダヤ人を含む、が追放され、財産を奪われ、または殺されました。これがナクバでした。残ったユダヤ系パレスチナ人の多くはイスラエル市民になりましたが、シナイ以前にまで遡るルーツを持つキリスト教徒とムスリムのパレスチナ人は追放されました。

この悲劇をさらに悪化させるのは、多くのキリスト教徒とムスリムのパレスチナ人がユダヤ系パレスチナ人の隣人、友人、さらには親戚であったことです。コミュニティは絡み合って、血縁だけでなく、共通の言語、習慣、土地で結ばれていました。今日、残った人々は軍事占領、包囲、飢餓、爆撃に晒され、かつての隣人たちは「イスラエル」と名乗るナショナリストプロジェクトに仕えることを強いられ、契約の精神を反映しなくなっています。

犬をシーザーと呼ぶ：シンボルが真実の代わりになるとき

現代の国家を「イスラエル」と名付け、その名に基づいて神聖な権利を主張することは、犬を「シーザー」と名付け、ローマ帝国の正当な後継者だと主張するのと同じくらい正当ではありません。ブドウを食べさせ、トーガを着せ、ラテン語で吠えるように教えても、その名前は帝国の支配権を与えません。彼は軍団を召集し、ガリアで税を集め、カルタゴを主張することはできません。名前はパフォーマンスであり、血統ではありません。ジェスチャーであり、系譜ではありません。

それでも、シオニズムはまさにこれを行いました——現代の政治プロジェクトを古代の契約の言語で覆い、その象徴性だけで精神的・領土的正当性を与えると仮定しました。これは誤った方向への儀式です：「イスラエル」という名前を呼び出し、何千年も前に書かれた聖句を指し、1948年に世俗的ナショナリズムと植民地暴力によって生まれた国家がその継承者だと装います。そうすることで、シオニズムは契約を更新せず、それを模倣し、その倫理的核心を空洞化しながらそのシンボルを武器化します。そして、マイク・ジョンソンのような福音派指導者が聖句でこの模倣を神聖化するとき、彼らは神の真実を守っているのではなく、衣装を祝福しているのです。

福音派の盲目：真実ではなく名前を崇拝する

マイク・ジョンソンのようなアメリカの福音派キリスト教徒は、創世記12:3を誤解し、キリストとムハンマドの両方を拒否する創設イデオロギーを持ち、聖書、トーラー、コーランの核心的道徳的教えを破る現代国家に適用します——すべては、一人の無垢な命を破壊することは全世界を破壊することに等しいと述べています。「一人の命を破壊する者は、全世界を破壊したとみなされる」（サンヘドリン4:5）。「それゆえ、われわれはイスラエルの子らに命じた。誰かが命を取るならば、それは全人類を殺したも同然である」（コーラン、アル・マアイダ5:32）。これらは文化的提案ではなく、神聖な絶対です。壁を築き、爆弾を投下し、市民に包囲と飢餓を強いる国家を祝福することは、神への従順ではなく、三つの言語での冒涜です。

結論：契約は留まった者たちと共にある

土地は、その名前を呼び出す者に属するのではなく、その歴史を生き、信仰を担い、預言者を尊んだ者に属します。イスラエルの真の連續性は、現在その名を冠する国家ではなく、パレスチナ人——ムスリム、キリスト教徒、ユダヤ人——の中にあり、彼らは神の啓示の各段階を受け入れ、祖先の土に根ざし続けました。

現在の形態のイスラエル国家——収奪、暴力、アパルトヘイトに基づく——を支持することは、アブラハムの種を祝福することではなく、契約を呪うことです。それはモーセ、イエス、ムハンマド（みなに平安あれ）と一致するのではなく、ファラオ、ヘロデ、アブ・ラハブと一致することです。

イスラエルが子供を飢えさせ、家を平らにし、市民を虐殺する中でイスラエルを支持する者は、祝福されません。彼らは呪われます。彼らは一時的に富と権力で公的責任から身を守るかもしれません、残りの人生を正義から逃げ隠れすることになります——法廷で、良心で、歴史の中で。そしてそれは、彼らを待つ来世でのほんの一部の試練にすぎません。

なぜなら、アブラハムの神は専制を祝福しないからです。契約は決して抑圧者の盾ではなく、忠実な者が担う重荷でした。そして、帝国の正当化のためにその契約を歪めた者たちは、評論家や政治家ではなく、彼らが冒涜する神の名に答えることになります。